背中合わせアンソロジー
アルギエバ

ギイ・クラレンスの挑戦と失敗

立田

I　慣用句と橋から飛び降りた少年

『天秤を傾ける』という慣用句がある。

ある日、天が割れるような唐突さで身にあまる栄誉が与えられた者や、努力もしていないのに富が転がり込んできた者を指す言葉だ。この世界と【裏返しの世界】の平衡を崩して己の【半身】の運を奪い取ったのだ、と訳知り顔で説く人間もいる。やっかみ半分、妬みと謗(そし)りが残りの大部分、けして良い意味の表現ではない。

話は変わるが、『天秤』といえば首都マリアハルを左右に分ける川に架かる橋の異名でもある。遙か下方の水面から華奢ともみえる橋脚がそびえ立ち、それを中心として両岸に優美に翼を広げたような姿は、なるほど首都の名付け親たる女神が常に手に携えて人に与えられるべき運を衡(はか)ったという道具に重ね合わせることができる。

首都のシンボルとして名高いこの天秤橋には、数百年を経る間に様々な言い伝えがつきまとうようになった。

その一、満月の夜、月がちょうど橋の真上に来た瞬間に橋の上から川面を覗きこめば、【裏返しの世界】の【半身】の顔が見えるという。

その一、夜に覗き込むなどせずとも、自分の鼻先も見えないほど霧が深い日に天秤橋を一人で渡れば、幾重にも重なった白いカーテンをかき分けるようにして向こう側から歩いてくる自分の【半身】とすれ違うのだという。

その一、いやいやすれ違うのは【半身】などではなく死魔であり、出会ったが最後、命を奪われるまで追い回される。【半身】に出会いたいのであれば、天秤橋から飛び降りるのがよろしい。その場合、ボルダレスに事前に一報を入れておけばなお良い。その名のとおり、こちらと【裏返しの世界】の境界をたやすく越える彼らの助けさえあれば、死魔から逃

げきることも夢ではない。

あれもこれも、まったくなんの根拠もない。真実の欠片があったとしても人の口から口へと泳ぎ回る間に体よりも大きな背びれ尾ひれを生やしていることは誰もが重々承知している。

それでも、その年の最後の月の始めに、天秤橋から一風変わった飛び降りがあったという噂が立ったときには、これらの言い伝えを思い起こす者もいた。

聞くところによれば、飛び込んだのは、まだ子供らしさを残す少年だったという。

その少年は、自分から氷水に飛び込むという暴挙に及んだくせに、その際、暖かな防寒着を山ほど着込んでいたのだという。

そして、そのポケットは、金塊でぱんぱんに膨らんでいたのだという。

Ⅱ　彼女の名はシエラ・クルー

首都ラハイラムの朝は早い。

まだ星のきらめく寒空の下、大教会の鐘の音が中央広場から街中に広がっていく。それが合図のように人々が屋外に姿を現しはじめ、一刻もしないうちにすべての街角に喧噪が満ちる。

（……笑わなかったなあ）

僕は双眼鏡を下ろして、人の往来が増えてきた道の観察を止めた。

時刻は朝六時少し前、立ち並んだ瓦斯（ガス）燈が消えはじめた頃だ。向かいの女学校から出てきた少女は石畳の上に置かれた薔薇を抱え上げたものの、数度辺りを見回しただけで勝手口にすぐ姿を消してしまった。

「どうでした、ぼっちゃん」

「だめだった」

そうでしょう吾輩の言ったとおりでしょう、と羊のぬいぐるみが偉そうに胸を張った。黒くてもこもこの丸い体、白い顔につぶらな瞳。見た目はかわいらしいのに、やけに渋くていい声とでかい態度が気に障る。いらっとしたまま窓枠につまみあげて、顎をのせて潰してやった。

「ちょっ、ぼっちゃん！　ギブですギブ！　いやわかります、淑女に花を贈るのは紳士のたしなみですからな。ですからこのアルフレド、ぼっちゃんのなさったことをけして否定しているわけではないのです、ですから離していただきたいですな！」

よじよじと体をひねるので、顔がくすぐったい。我慢できずに離してやると、羊は短い手足で体についた埃をはらった。

「しかし人間の三大需要といえば衣・食・住。ぼっちゃんのプレゼントはそのどれにもあてはまらない。やはりこの場合は見当違いなのではないですかな」

「まあね」

認める。アルフレドの意見はもっともだ。僕だって考えなかったわけではない。防寒着とか食べ物とか、もっと実用的なものを。花なんて、なんの役にも立たないとわかっている。

「でもそもそも最初は女学校の生徒っていう話だったから！　なのに！　なにがどうしていつのまに召使になっちゃってるの！」

「授業料等すべての遺産を預けていた銀行が倒産してあっと言う間に無一文になったからでしょう。【茨鎖の錘】の一効果ではないですかな。ぼっちゃんが橋から飛び降りても傷一つなかったときはさすが運の強い方だと感心いたしましたが、彼女の転落が代償だったのでは？　いやあ、見上げた疫病神っぷりですな」

「やめてあれ迷信でしょ……こんなんじゃ顔向けできない……」

頭を抱えて僕はうめいた。【茨鎖の錘】なんて迷信のはずだったのに。僕だって、彼女が召使いとしてこき使われていると知っていたら、唐突に花を贈るような真似はしなかった。空回りっぷりが悲惨すぎて、他人事だったら確実に笑う。

いつのまにか、時刻は六時。ここ【裏返しの世界】と僕が生まれ育った世界――僕の属する世界――の時間の表示が一緒になる数少ないタイミングだ。【裏返しの世界】の時計の針の進み方は、僕にとっての反時計回りだから、僕はいまだに混乱する。

【裏返しの世界】は、僕の属する世界の裏側にある。

【裏返しの世界】では、僕の属する世界が裏側になる。

どちらが表でどちらが裏かの論争はさて置くとして、裏側

というのが実際どういうことかの説明は、言葉では難しい。うまく言えないけれど、たとえば水面に逆さまに映っている景色、あれが目を凝らしたら実は鏡像ではなくて、細部が微妙に違う別物だったという感じだ。

天秤橋のかかるアルシ河、その穏やかな川面を挟むようにして二つの世界は背中合わせになっている。面積も、文化の発展程度も、そして住人もほぼ同じ。そんなわけで、【裏返しの世界】を、その昔は【鏡の向こう】と呼んでいたらしい。

そして、鏡の前に立てば自分の写し身が映るように、【裏返しの世界】には【半身】がいる。自分の【半身】とは自分の対になる存在だ。魂の糸で結ばれた、運を分かち合う人間。そこで例の慣用句が生み出された。『天秤を傾ける』。

多分、人々は自分とその【半身】を、一本の糸の両側につけられた錘（おもり）のようなものだと想像したのだ。一方が下がれば、一方が上がる。【半身】の不幸は、ご愁傷さまだけれど自分にとっての蜜の味。幸運と不運の絶妙なバランス。

そんなわけで昔は、もう一つの世界を征服したら自分の住んでいる側の世界の暮らしが良くなるはずだからとお互いを侵略するための無駄な試みが何度もなされたりしたらしい。今では、そんな幸運・不運バランス説に根拠がないことはもちろん、世界間移送のコストとリスクが高すぎて征服しても割に合わないことも判明して、二つの世界はゆるゆると共存の道を歩んでいる。共存というよりは、外交上の必要性か金持ちの道楽を除いて、互いにさほど積極的には干渉していないというのが現状だ。

ここで出てくるのが、僕の愛すべきばかな母親だ。自分の母親でなくて、僕のことを慈しみ育ててくれたという記憶がなければ、形容詞は「ばかな」だけになってしまうだろう。母はまだ若い頃に勤め先の成金貴族の御曹司に手をつけられて僕を身ごもった。その後細々と暮らしていた母子に転機が訪れたのは、その成金貴族の血筋が不慮の事故によってあわや絶えそうになったときだった。こんな僕でも直系ということで、きらびやかな馬車が下町まで迎えにやってきた。そして僕達二人の生活は一変してしまったのだ。

一瞬にして大金持ちになったことと引き替えに、僕の生活は急に忙しくなった。外国語、数学、礼儀作法に舞踏。母と引き離されて僕もさみしかったけれど、することがたくさんあったぶん、ましな状況だったようだ。お飾りとしてつれて

サテモ散ル散ル花ノ先

楠園冬樺

はらりはらりと残り花。あわき花片（はなびら）舞い落ちて、くたりと地面に横たわる。散り敷いたうす紅が、泥にまじってまだら模様。

雨がはけずに残る道、梅乃はついと見下ろして、いまいましげにため息落とす、今日いく度目であることか。

舶来あつかう商人の器量評判娘姉妹。姉は十八番茶も出ばな、妹も十七花ざかり。菊乃に梅乃とそれぞれに、うつくしき名のつけられた、気立ては姉が、かんばせは、妹の梅乃がまさるとは、おしゃべり口の町すずめ。

お乳母日傘に育てられ、蝶よ花よの身の上の、その梅乃嬢がなにゆえに、人けもすくなき川べりの林の中へひとりきり、踏み入る用などないはずを。

くちゃり足もとぬかる道、天色（あまいろ）の地に三色（さんしき）の揚羽蝶飛ぶ友禅の縮緬裾に泥はねて汚しやせぬかとひやひやと、気にし気にし歩み行く。

「もうっ、本当にいまいましい」

舌打ちこそはいたさねど、思わずついて出た口を、アラはしたないと白魚の指が押さえて、あたりを見回し。

「わたくしとしたことが」

通う人もないさまに、だれにも聞かれず済んだわと、ホッと今度は安堵の吐息。

そろりそろりと歩きだす、ぞうりがうす紅まだらを踏んで林の奥へまたさらに。したが数歩と進まぬうちに、花の陰から呼ばう声。

「田岡さま」

小夜鳴鳥（ナイチンゲール）の鳴き声に声作る主もまた若く、年のころも同じほど。灰紫のたて縞の銘仙（めいせん）引き立つ帯色に桜の紅を合わせ来て着こなす姿もあでやかな。

されど隠せぬ面やつれ、化粧の下に透けて見え。燠火のごとき暗い火を、目に燈したるこの娘、カッフェに勤める娼妓

まがい、雛芥子と名乗る女給なり。

「あなた、どういうつもりなの」

尋ねる声は癇性に、かんばせだけはとりすまし、毛を逆立てた針鼠、梅乃は雛芥子問いただす。

「こんなところへ呼び出して、話というなら早くおっしゃい」

雨も上がるや朝早く、そこらの子どもに駄賃して文寄越したのはなにゆえか。

『かねてよりのご相談、伊祖上さまのお事柄、至急お話しいたしたく。川べりの林にて、雛芥子お待ちいたします』

走り書いたる墨蹟でしたためられた文を読み、眉しかめながら抜け出してやってきたのがこの林。

そも伊祖上とは何者か。

ことのはじめはこの正月、明けてとんどに松飾りくべて作りしありがたの灰持ち帰り宅周り囲うように撒き終えて、茶果の支度を申しつけ、ひと息ついたあとのこと。

父の懇意の取引が、将来楽しみとの触れ込みで連れて挨拶来た青年。眉目すずしく背は高く、洋装似合うその姿。たった一目でぼぅとなり、梅乃が頬を染めたのは、色に出にけり歌に詠む古からの変わらずの、魂のあくがれかねぬ理由。

それが伊祖上、名は庸亮。八つばかりも梅乃より年かさなれど駆け出しの洋行帰りの商売人。折り目正しく学もあり、弁も立ちたる青年と、梅乃の父親田岡氏も覚えめでたく目をかけて、奥へも出入りを許すなり。

さてこの伊祖上庸亮は、娘ごころに気付いたか、まんざらでもない様子にて、以後用ありて寄るたびに、なにやらかやらと梅乃へと、女子好みの手土産を持ちて機嫌をうかがいにこまごま顔を見せに来る。

髪結いあげる毛斯綸の染め柄かわいい飾り紐、牡丹百合の帯留めに、ボンボン詰めてキラキラとまばゆく輝く陶器箱。不自由なき身は見慣れおり、珍しくなどなけれども、いっとう大事に愛でおれば、いかがなものかと様子見る親の心もだんだんにほどかれなびくも道理にて。

いずれめでたの約束を進めてみるかと父上が、声かけるまでそれほどの時はかからず、如月の半ばも過ぎたとある日に、二人並べて内々に意向を尋ねる話し合い。伊祖上断るはずもなく、まして梅乃の喜びよう、雲を踏んで空に浮く。後にからかい受けるほど。

されどものごと順序あり。姉の菊乃がまず先よ。菊乃の嫁

ぎが決まらねば、梅乃が先に許婚持つは世間の笑い種。そう母上が割り入って、娘可愛い父上もそれが道理と肯きて、仲を認めはするがとて、口約束にとどめおく。

さて、内々とはいうものの、許しが出たには変わりなく。みなの川ではなけれども恋ぞつもりて淵となり、やがてあふれる恋情に、表ですらもわがままを梅乃隠さず見せはじめ、ついには人の口の端に、田岡の下の娘がと、なにかと上るになったれば、噂されるを厭うたか、あれほど顔を見せていた伊祖上の足が遠くなる。

一日千秋いら立ちて梅乃気鬱に過ごすうち、親切めかして奉公の女中の一人が伊祖上の所在行状聞きこんで、ひそりと梅乃に耳打ちし、梅乃の血相変わりたる。

「聚楽館の傍にあるカッフェの女給に入れあげて、日がな一日通いづめ。雛芥子という評判の若い女給が相手だと、耳にいたしてございます」

まさかそんなとはねつけて、空笑いなどしてみれど、嘘ばかりとも思われず。胸も潰れん心地して、梅乃走りて行く先は、いささかサービス過剰かと、近ごろ巷に評判の聚楽館傍カッフェなり。

カフェ・ライオンやタイガーに比べるものにはなけれども、青みがかった雪白の石を化粧張りにした美々しい欧風スタイルの二階建なる建物の、いろどりうるわし赤青のステンドグラスの窓越しに、漏れ聞こえくるレコオドと女給と思しき嬌声に、店の前で足すくみ、うろたえ立ちておるうちに、ついにガチャリと戸が開く。

「梅乃さん」

間良きか悪きか現れる、件の伊祖上庸亮のわずかに赤き顔色は、日中に飲みしアルコオル、それとも腕にからまった不実を見られたゆえにてか。

腕にからまる不実花は、なるほど評判顔かたち、梅乃ほどではなけれども、愛嬌ありげな美人なり。矢がすり着物に白エプロンお仕着せまとう躰つき、婀娜婀娜しさまが匂い立ち、しなりと添うた立ち姿、ただならぬ仲もあからさま。

なれど太きは伊祖上の胆のありよう、厚顔よ。雛芥子にひとつ耳打ちし、組みたる腕をほどくなり、はだかるように大股に梅乃の前へ歩み寄る。

「どうしていらっしたのです。ここはあなたのようなお嬢さんの来る店ではありません」

最後の竜が眠る森

立神勇樹

――今日、世界で最後の竜が死んだ。

手足どころか、視界までもが麻痺したかのような白い世界に置き去りにされていた。

いや、置き去りにしたのは自分かもしれないな。と、オブリーオはらちもないことを考えながら、雪を避けるため駆動鎧に包まれた腕を眼前にかざす。

だが見えるのは機械装甲に覆われた腕ばかりで、今、自分がどこにいるのか、前に進んでいるのか、立っているのか、座っているのかすらわからなかった。

たかが雪。デウス・マキナが精力を尽くしてあつめた古代技術の粋たる駆動鎧さえあれば、何も恐れる事はない。とあなどっていた。

しかし実際はどうだ。

身体こそは温度が調整された鎧につつまれており、生身が露出している部分など無いにもかかわらず、心から凍った血液が全身を巡り、それが手足を痺れさせている感覚に襲われ続けて居る。

騙されるな。視覚情報から連想される記憶の罠だ。ありえない。ありえない。寒さなど感じることなどない。

そう自分に言い聞かせてみるものの、心はまったく理性にそぐわない。

瞳の部分を覆う強化硝子の部分を手でぬぐう。その手を包む鉱物素材には霜とも氷ともしれぬなにかがびっしりと固まり付いている。

喘ぎながら息を吸い込み、倒れるように一歩前にでる。

一緒に”森”へ入った小隊の仲間達は、すでにどこかへと消えていた。

数時間前に入れた救助要請の電信も、砂嵐か吹雪のような音により阻害され、届いた様子はまったくなく。

通信不能を伝える機械的な雑音と、鎧一つ隔てた外の静寂だけが全てで。生き物など一つとて見当たらず。植物すら死を迎えているようだった。

燃料が落ちてきたのか、駆動鎧は手足の筋力を補助する役目をすでに果たしておらず、ただ鋼鉄の防寒具になりさがっており手足を動かすのもとにかくおっくうだった。

――ここで、死ぬのか。

酸素不足か、それとも温度低下か。

どちらとも知れぬ原因により、徐々に生命力が落ちていくのを――それを伝える鎧の警告音すらどこか遠いのを感じながら、さらに一歩踏み出した途端、かくも見事にオブリーオはつんのめり、降り積もり、腰すら隠す雪の中へと倒れ込んだ。

面白いほどずぶずぶと身体が白の世界に包まれていく。

この雪の彼方に、豊かな緑につつまれた科学技術の遺跡があるなど嘘のようだ。

一体、何のために化け物巣くう汚染された沼地を越えてきたのか。それすらもわからなくなってきていた。

最後の気力を振り絞って開けていたまぶたが、重くなっていく。

ここで、死ぬのか。

もう一度思う。

誰が側にいるわけでもない。誰がたたえるでもない。誰が遺体を引き取るでもない。

その名前の通り、生まれの通り。

忘却の意味を示す通り。

自分は死に、忘れ去られていくのか。

ふ、と漏れたのは悲しみのため息だったのか、それとも自嘲の笑みだったのか。

それすらわからないまま、意識は徐々に混濁し、雪に埋もれるように途切れていき。

最後に、どこかで、狼が遠吠えするのを、聞いた、気がした。

「ライゼ」

傍(かたわ)らにいる、黄金の毛並みもつ狼の名を呼ぶ。

名を呼ばれた狼は、その巨体を――後ろ足で立ち上がれば

人など軽く凌駕する躯をくねらせ、ほんの少し先にある盛り上がった雪溜まりの前で立ち止まる。

もう一度名を呼ぶ。

竜の骨から作られたかぶとから漏れる声は、さほど大きくはない。だが、それでも、狼の敏感な耳には良く届いていることをエルシュラインは理解していた。

――侵入者が、行き倒れたか。

月に一度は行う『森』の巡回で、こうして行き倒れたデウス・マキナの兵士を見つけるのは今はもう珍しくもない。

ただ、ここまで奥深くまでたどり着くとは――汚染された沼に囲まれた森の最深部とも言えるべきこの場所にたどり着く兵士を見つけることは、エルシュラインが竜騎士としてこの森で暮らし始めて七年で初めてのことだった。

まして、上級将校であり軍の幹部候補とみなされるパラディンとは。

ほかの兵士たちが――駆動鎧により森を囲む沼地の汚染から守られているとはいっても――病んだ大地に巣食う魔物に襲われ、沼を越えることすらできないのを考えれば、これは驚きを飛び越して呆れてもいい出来事だった。

ライゼが、黒曜石さながらに艶光りする鼻を雪の中に突っ込んでは、その下に居るだろう兵士をつついている。

それを眺めながら、頭部を守る竜のかぶとの中で顔をしかめる。

ここ最近の、デウス・マキナの――古代技術の収集を目的とした狂信者たちの侵入は、酷くなる一方だった。

森を擁するアルマ・ドラコの王が変わってから、それは留まるどころか、加速するばかりだ。

彼らは、森の奥にある竜の住処に眠る旧世界の技術を求め、ここ最近頻繁に侵入し続けていた。

本来なら、竜が眠る神聖で恐ろしい森とされているこの場所に、竜の盟約者であるこの国の王自ら侵入を許すとはまるであり得ない事だった。

とはいえ、それがエルシュラインの生活に何らかの変化を与えるかといえば、そうでもないが。

ため息をつき、前足で雪溜まりから死体を掘り起こそうとしているライゼに向かって歩く。

マキナの兵など放っておけ。と、告げようとした時だった。

ライゼが、喉を大きくそらし、吹雪を、それを呼ぶ天すら

威嚇する勢いで大きく吠えた。
耳を聾するほどの、だが、見事な伸びと豊かな響きもつ声がおのずエルシュラインの息を飲ませる。
それに呼応し賛同するかのように、遠くから響く雷鳴じみた声。
だがエルシュラインはそれが雷鳴などではなく、竜騎士である自分唯一の主であり、すがるべき神の声であるのを理解した。
――生きて居るのか。
放置すべきだ。
それはわかっていた。
このまま放置すれば、森が全てを片づけてくれる。
それもわかっていた。
だが、エルシュラインはただ立ち止まり。
ライゼが苦心して、その輝かしいばかりの黄金の背中に、無骨な駆動鎧の固まりを押し上げようとしているのと、さきほど響いた主――竜の声を思い出しながら、ただ、胸騒ぎとともに倒れた兵士を見つめていることしかできなかった。

忘れなさい。と父は言った。
母は、それを子の名前とせよという命に受け取った。
母は知らなかった。それがマキナで「忘却」を意味する単語だということを。
大世界崩壊後、残された古代の科学技術をよすがとたどり占有することで、この荒れ果てた世界で権力をたもつ道を選んだ国家的宗教組織デウス・マキナ。
そのマキナの大将校でありマスターパラディンと呼ばれる地位にあった父が、古代遺跡調査の為に踏み込み征服した国で出会った現地の娘。
そんな母に生ませた子供。それが、オブリーオだった。
死がつきまとう任務から逃れる為の快楽。ただの一時しのぎの結果でしかなかった子供は、本来であれば名前の示す通り忘れ去られる運命にあった。
ハイキョと地元の民から呼ばれる、天まで届きそうな石とも漆喰ともつかぬ白い外壁もつ空洞と硝子の窓もつ塔たち。
旧世界の遺物を腹のなかにたっぷりとため込んでいるその遺跡に目をつけたマキナの上層部が、現地の民たちに活用でき

銀の滴降る降るまわりに

玉蟲

ひとと せに、悲しみと同じ温度を持たぬ日が、幾つあるだろう。ひとつ、ふたつと指折ろうとしても、上手く数えることが出来なかった。

ぼやけた視界が鮮明になる前に、冷えた空気に触れた身体がぶるりと震えた。わたしは反射的に肩をさすろうと腕を伸ばしかけ、痛みに顔を歪めた。ゆっくりと上体を起こして周囲を見回すと、鬱蒼とした森の中に、斜陽の朱い切れ端が差し込み、木陰を一層黒く染めていた。鼻をつく濃い土の香りがわたしを覚醒させ、己の置かれた状況を思い出した。

わたしは、襲われたのだ。蝦夷（えみし）の兵に。

狙われていた……わけではない、と思いたい。襲った者たちが、わたしが何者かを知っていたら、既にこの世にはいないだろうから。

わたしは蝦夷島（えぞがしま）の南部一帯を収める豪族、安東太師季（あんどうたもろすえ）の娘だ。蝦夷人の仇敵たる男の娘を、まさか知っていて放置したとは考えられない。

襲われたわたしは、郎党（ろうどう）たる工藤祐長（くどうすけなが）殿の手を借りて白昼の山道を駆け抜け、逃げた。だが、行く手を数人の蝦夷に阻まれた。

――姫様、お逃げ下さい！

工藤殿は太刀を抜き、わたしの退路を確保してくれた。咄嗟に森の中に入ったのは良いけれど、獣道で足を踏み外し、崖から転がり落ちてしまったのだ。

その衝撃で気を失っていたらしい。身動きする度に節々が痛んだが、大きな怪我はなさそうだった。

数刻前に、争いがあったなんて嘘のように静かだ。蝦夷の兵もわたしの護衛も近くにはいないのだろう。

木立を吹き抜ける風が、わたしの身体にまとわりつく。足を抱え込み、ぎゅっと身を丸めた。裾から覗く素足は青白く、土にまみれていた。草鞋は転がり落ちた時に、どこかへいっ

てしまったのだろう。

寒さを凌ぐものはないか、と改めて身の回りを確かめると、尻の下にくしゃくしゃになった打掛を敷いていた。慌てて引っ張り出して広げる。

亀甲文様の地紋も美しい紅白市松柄の豪奢な打掛は、見事に泥に汚れていて、わたしは深くため息を吐いた。命が助かった喜びよりも、打掛が台無しになった落胆のほうが、もしかすると大きかったかもしれない。

ひとまず、寒さから逃れる分には役立つ。頭から被けて前を閉じ、なるべく風が通らぬようにした。

（……これから、どうすれば良いの）

恐らく、工藤殿たちがわたしの行方を探しているだろう。そう遠くへ離れてはいないならば、大人しく待っているべきだけど。

（……見つけてもらえるのかしら）

心細さを覚えて、わたしは更に身を縮める。蝦夷島の夜は、夏と言えども冷え込む。感覚が希薄になりつつある両足の指を擦り合わせ、僅かでも暖を取ろうと足掻いたが、気を紛らわす意味合いしかなかった。

このまま動かず一夜を過ごすか、郎党たちの助けを待たずに逃げるかを迷っていると、上の方から会話が聞こえた。

「！」

わたしは息を飲んだ。聞こえてきたのは、独特の響きをした言葉の遣り取り――蝦夷たちだ。

彼らはひとしきり大きな声で何かを呼ばわり、がさがさと下生えを踏みつける音が続く。わたしは背を崖に張りつけ、見つからぬように神仏に祈った。手の震えはなかなか治まらず、身じろぎしただけで居所がばれそうな気がした。

ぴたっと彼らの足が止まった時、わたしの心の臓も動きを止めた。永遠にも思えた一瞬が過ぎ去ると、気配が次第に遠のいていく。

ほっと息をついて、助かった、と小さくこぼしてみたけれど、皆とはぐれてひとりぼっちの状況が、果たして捕まるよりも良いのか、定かでない。

蝦夷たちが徘徊しているということは、工藤殿は一度引き上げたのかもしれない。わたしは動くことを恐れたが、このまま立ち止まっていても、救いがあるわけではない。ゆっくりと立ち上がって、わたしは歩き始めた。

大和国の北は陸奥と呼ばれ、津軽海峡を隔てた向こうにある蝦夷島との交易も活発に行われている。安東氏と言えば、津軽の守護として勢力を誇り、北の内海交易の主の名を欲しいままにしていた。けれど、同じく陸奥の有力豪族である南部氏との争いで、安東の惣領家は一度その流れを絶った。

再び安東氏の名が聞こえるようになったのは、惣領家が消えてから十数年後、皮肉にも南部氏の計らいによって、だった。

安東氏の傍系であるわたしの父・師季（もろすえ）は十歳の時、戦に破れて、敵方の南部氏に捕らわれた。以後十年間、糠部（ぬかのぶ）という地で、監視の元に生かされていたと聞いている。

南部氏が父に元服を許したのは、父が二十歳の時。それは、わたしが生まれた年でもある。父は安東太師季と名乗り、田名部（たなぶ）の領地を預かった。

田名部は良港であると同時に、南部水軍の拠点でもあったから、かつての敵に対する処遇としては、温情に満ちたものだろう。

しかし、南部氏とてただの親切で、父に惣領家にしか許されぬ安東太の呼称を与えたわけではない。

安東と南部の争いは、京におわす室町殿の目からは、陸奥の乱れと見えて、再三和睦をなすように、という諫言があったようなのだ。加えて、陸奥にも蝦夷にも安東氏の同族は数多く、圧力を強めれば、更に南部氏への不満は募る。更に、父を産んだのは、南部の当主の娘だったから、孫可愛さも多少はあったのかもしれない。

南部氏は室町殿の無聊を慰め、安東の不満を躱し、且つ温情もある、と示す一手を打ったのだ。

もし父が南部氏の意図に沿い、盤上の石の一つでいたならば、わたしはこんな山中に取り残されて、彷徨うことはなかったのかもしれない、とそっとため息をこぼした。

尖った小石や木の枝が、下生えの鋭利な葉の先が、わたしの足を容赦なく傷つける。慣れぬ道行きに、身体は限界を訴えていた。

誰もいない不安に苛まれていても、わたしはひとりでいることに、かすかな安堵も覚えていた。安東の屋敷は常に父の気配があり、息苦しかったから。

わたしは、父が苦手だった。同じ屋敷に住んでいたにもか

かわらず、三年前に裳着を迎えるまで、顔を合わせたこともなかった。

わたしを言祝ぐため、と対屋（たいのや）にやってきた父の目に喜色などなかった。それどころか憎悪と呼ぶべき苛烈さを宿していて、型通りの祝辞を受けている間ずっと、わたしは父の目を避けるように俯いていた。

ずきりと足が疼き、わたしは手近な木立に凭れかかった。そのままずるずると座り込んでしまうと、もう一歩も動けなかった。

汗が熱を吸い取ったのか、肌が泡立つのを感じる。寒気を誤魔化すために二の腕をさすった。ふと赤く腫れた爪先が目について、そっと手で触れると氷もかくやという冷たさだった。

夜は駆け足に訪れて、わたしの視界を閉ざす。木々は夜を手助けして、星明かりすら遮る。真下を確かめることも儘ならず、為すすべもなく闇を見つめた。

――乙楠（おとくす）、お前は幸せになるのですよ。

不意に蘇る母の声。儚げな容貌の母は、わたしの頭を撫でながらそう言った。今にも溶けてしまいそうな微笑みは、切ないほど幽玄で美しく、わたしの心を引き裂いた。

「……母様」

わたしが現世で縋れた、唯一の人。

唇を噛んで、涙を堪えようとしても無駄だった。わたしの眦からは暖かな滴がこぼれていく。身体の熱も何もかもを失うような錯覚に襲われて、恐ろしかった。

（大丈夫。郎党たちがわたしを探しているに違いない。わたしが見つからなければ、きっときついお叱りを頂くことになるもの……）

ぐずぐずと泣いていても、慰める手はどこにもない。仕方なしに己で己を叱咤した。

わたしは目元を些か乱暴に擦って、きつく目を閉じた。例え、二度と目覚めなくても構うものか。

眠りに絡めとられて沈むまで、まなうらには寂しげな春の有終がちらついていた。

翌朝目覚めると、周囲は白っぽく煙っていた。まだ靄がかかり、遠くの木立の影がうっすら見え隠れする様は、どこか妖めいていて、夢と現のあわいにいるようだった。今にも猿

チョコレート・パラノイア

青波零也

空を重たい雲が覆った、憂鬱な二月十四日。

タクシーから降り立った八束結（やつづか・ゆい）は、ベージュのコートの前をしっかりと合わせ、無い胸を張って歩き出す。そして、三歩歩いたところで振り返る。背中で結った長い黒髪をしっぽのように揺らした八束は、タクシーから降りた時点から柱にもたれかかって動かない、黒いロングコートの男を呆れ顔で見やる。

「何やってるんですか、置いてきますよ？」

少し離れたところからも、震えているのが明らかなスキンヘッドの男――八束の『教育係』である南雲彰（なぐも・あきら）は、青白い頭を横に振り、弱々しく言った。

「むしろ対策室に置いてきてほしかった……」

「それはダメです。二人で動けって係長からも言われてるじゃないですか」

「俺がいなくてもお前なら大丈夫だ。八束はできる子だって信じてる。だから俺は帰る」

颯爽とコートの裾を翻しかけた南雲に、八束は鋭く言葉を投げつける。

「南雲さんがデスクの上に並べてるテディベア、あとでまとめてゴミに出しますね」

「ごめんなさい頑張ります」

脅迫にあっさり屈し、南雲はふらふらこちらに歩いてきた。骨と皮だけの痩躯に、ほとんど剃り跡も見えない剃髪が特徴的なその姿は、さながら黒尽くめの骸骨だ。黒いセルフレームの眼鏡の下の、落ち窪み、べっとり隈を貼り付けた目元を見るともなしに見上げて、八束は念のため問いかける。

「……あの、大丈夫ですか？」

「だいじょばない。寒い」

「暑いのも苦手じゃありませんでしたっけ？」

「人間、暑さにも寒さにもそんなに強くできてないって。八

束がどうしてそんなに元気なのか、俺には理解できない」
南雲の顔色を見る限り、どうも人間すら辞めはじめている気もするが。そんな思いは心の内側に飲み込んで、八束は背筋を伸ばす。
「わたしだって、寒いものは寒いですよ。けれど、わたしたちを必要としている人が待ってるんですから、寒さなんかに負けてはいられません」
「お節介、とか、余計なお世話、ってことも往々にしてあるけどねえ」
南雲の茶化すような言葉に、八束はむっとする。ただ、軽い言葉に反して南雲はいつもの仏頂面を白い面に貼り付けていて、何を考えているのかさっぱりわからない。そうして八束が判じかねている間に、南雲は一歩前に出た。
「さて、今日はどんな奇人変人が待ってるんだろうな」
南雲が見上げる先を、八束も見据える。灰色の空の下には大きな門、そしてその向こうには絵本で見たような洋風の屋敷が佇んでいた。南雲はずんずんと前に進み、門の横に備え付けられたインターフォンの前に立つ。
俄然てきぱき動き出した南雲を、少しだけ見直しかけた八束だったが。南雲は、突然くるりと振り返って、紫色の唇を震わせて言った。
「早くしてくれ八束。とにかく俺は部屋の中に入りたいんだ」
「ああ、そうですよね……」
肩を落とし、一瞬やる気を出してくれたのかと思ってしまった自分の浅はかさを呪った。だが、ここで立ち尽くしていても仕方ない。八束はインターフォンを押し、返事を待った。
すると、微かなノイズと共に、柔らかな女の声がした。
『はい、どちらさまでしょう？』
「待盾（まちだて）警察署の八束結です」
「同じく、南雲彰。三峰蓮華（みつみね・れんげ）さんからのご相談を受けて、参りました」
『……ああ、本当に、来てくださったんですね』
インターフォン越しの声には、確かな安堵が滲んでいた。今開けます、という言葉と共に一旦インターフォンの向こうの音が途切れ、しばし冷たい風に身を任せていると、屋敷から一組の男女が現れた。今時のごく普通の大学生という風体の茶髪の男と、清楚なワンピースに身を包み、上からコートを羽織った物憂げな女。年齢はやはり大学生くらいだろうか。

そのうち、女の方が門を開けて、二人に向かって頭を下げた。
「わざわざお忙しいところ、本当にありがとうございました。三峰蓮華です」
「蓮華、この人たちは？」
男は三峰に向かって問いかける。三峰は、口の端に笑みを浮かべて、男を見上げる。
「待盾署の刑事さんよ。脅迫状について相談したら、もしものことがないように、って来てくれたの」
「おいおい、あんな子供騙しを真に受けるなんて、どうかしてる」
「でも……」
「刑事さんたちも、こんないたずらに付き合わせてしまって申し訳ありません。本当に心配性な奴で」
男は、心底申し訳ないとばかりに八束と南雲に向かって頭を下げる。しかし、八束はそんな男を真っ直ぐに見据え、背筋を伸ばして凛と声を張る。
「確かに、単なるいたずらかもしれません。それでも、『もしも』に備えるのが我々警察の役目です。何事もなければ、それでいいんです。三峰さんの不安を取り除くことも、わたしたちの仕事の一つなのですから」
八束とて話を聞かされた時は単なるいたずらを疑ったし、対策係で今まで扱ってきた相談事の八割はそんなものだ。だが、三峰の不安げな表情を見ていると、こちらまで胸がちりちりしてくる。
どんなに馬鹿げた話でも、対策係を頼ってくる者にとっては一大事なのだ。それを、対策係に回されてから数ヶ月間、肌で感じてきた八束にとって、相談事に全力で当たるのは当然だった。
そんな八束の意気込みを、目の前の男がどう受け取ったかはわからない。ただ、男は顔を上げて、ふっと息をついた。
「まあ、刑事さんがいてくれるだけで、蓮華の不安が少しでも晴れるなら、俺も何よりです。こいつ、一週間前から脅迫状のことで頭がいっぱいで、辛そうだったんで。今日一日が無事に過ぎてくれれば、それでいいんですけど」
「何事もなく、この一日が終われば。私も、またゆっくり眠れると思うの」
「そうなるといいな、蓮華」
男は三峰の肩を抱き寄せ、三峰は男の腕に体重を預ける。

横で南雲が「見せ付けるねえ」と呟いた気もしたが、ひとまず無視を決め込んだ。

このまま二人の世界へ突入しかねない男と三峰を前に、八束はあくまできっぱりはっきりと言葉を放つ。

「それでは、今回の脅迫状について詳しいお話を聞かせ願えませんでしょうか」

「ええ、もちろんです。どうぞこちらへ」

八束と南雲は、三峰と男に連れられて屋敷の中に足を踏み入れた。屋敷の中に足を踏み入れた瞬間、外界の冷気から隔絶されたことで、八束も自然と肩の力を抜いていた。いくら強がっていても、寒いものは寒いのだ。

案内されたのは広い客間だった。外から見た屋敷の立派さに違わず、決して派手ではないが、上等な調度品によって設えられた部屋だ。ただ、玄関から通ってきた廊下や、扉を開けた瞬間に目に入った棚の上など、あちこちに埃が積もっているところを見るに、ほぼ手が入っていないようだ。

それに、気になったのは、窓だ。どこも雨戸が閉められ、内側から板が打ち付けられているところすらある。何とはなしに流れる不吉な雰囲気に、項の辺りが冷え冷えするのを感じる。

その客間には先客が一人いた。ソファにふんぞり返るようにして腰掛けていた短髪の女が、こちらを認めて勢いよく立ち上がる。日に焼けた顔には、どことなく緊張の表情が見て取れた。

「蓮華！　そっちが、お前の言ってた刑事さん？」

「何だ、知ってたのか。俺だけ仲間はずれかよ」

男ががりがりと後頭部を掻く。三峰は「ごめんなさい」と男に申し訳なさそうに苦笑してから、八束たちにソファを勧めた。

「どうぞ、おかけになってお待ちください。お茶を淹れてきますね」

「すみません、わざわざありがとうございます」

八束は部屋を出て行った三峰を見送り、コートを脱いでソファに座る。コートのままの南雲は座った瞬間に居眠りをはじめそうな雰囲気だったが、それはこの男にはいつものことなので、その場に残った男と女に意識を向ける。

男はじっと八束と南雲を観察している。目鼻立ちだけ見れば美形と呼んで差し支えないが、突然の来訪者である八束た

雲居の超能力者は朝が早い

藍間真珠

グラントル祭の日は決まって雨が降るという。エミーリヤがそんな噂話を思い出したのは、頬に冷たい滴を感じた時だった。瞳を閉じ、薄汚れた壁に手をついていた彼女は、目を開けてゆるゆると頭をもたげる。建物と建物の間から見える空は、相も変わらず薄ぼんやりとした白に覆われていた。しかし今の感触はいつもの霧とは違う。彼女は手をかざした。ぽつりと、確かな重みを感じさせる水滴が、指先に当たる。

「困ったわ」

エミーリヤは呟いた。霧に包まれていることが多いグラントルの朝に、明確な雨がもたらされることは稀だ。それでも時折は、堰を切ったように大雨が降る。そうなれば全てが洗い流されてしまう。まだ調査を始めたばかりだというのに、今日は仕事にならないかもしれない。

彼女は湿気で重くなりがちな銀の髪を、急いで頭上でまとめた。そして薄手の黒いコートのボタンを、首元までしっかり留める。保温効果を高めた生地なので、こうするだけでずいぶんと違う。少し困るのは窮屈なくらいか。よく伸びる素材だから動くのに支障はないが、体の線が露わになるのが好きではない。露骨な色香は、時に余計な仕事を増やす。

「お祭りの日くらい、働いていないで家に引きこもっていなさいってこと？　それは親切なのかしら」

踵を返して、エミーリヤは大通りを目指した。蔦の這う薄墨色の壁に挟まれたこの道は、路地と呼ぶにしても狭い。人間が通ることを前提とした場所ではない。無造作に転がっている木の箱を避けつつ、彼女は足早に進んだ。こんな場所まで踏み込むのは、彼女のような空中警備隊か、裏の世界で生きている人間くらいだ。昼間でも満足に日が差し込まないため、ただでさえ冷えるグラントルでもとりわけ寒い。人目にも付きにくいため、危険も多かった。

少しずつ雨脚は強くなっている。肌へ張り付きだした前髪

の感触が気持ち悪くて、彼女は顔をしかめた。つい歩調を緩め、手で額際へと寄せてしまう。そんなことをしている間にも体はどんどん冷えていくというのに。

その時、ふと視界の端に黒い何かが映った。彼女はぴたりと足を止めた。あまり目に入れたくない類の物のように思えた。振り返ると、薄暗い脇道の入り口に、木の箱が一つ放り投げられているのが見える。その先には横歩きでもしなければ入っていけない。彼女は近くに人の気配がないことを確認してから、そちらへと近づいていった。

「また、これは物騒ねえ」

木の箱の陰に落ちていたのは、黒々とした拳銃だった。エミーリヤは息を詰めて周囲へ視線を走らせてから、静かに片膝をつく。それは石畳の上で雨を弾きながら、鈍く光っていた。模造品でもなさそうだ。慎重に拾い上げると、想像していたよりも軽い。見慣れない型だと、彼女は瞳をすがめた。

「空中警備隊の物じゃあなさそうね」

つまり、違法品か。エミーリヤは顔を曇らせた。調査の対象ということだ。仕方がないと彼女はため息を吐き、拳銃を握る手のひらへと意識を集中させる。軽く目を瞑ると、瞼の裏側で白い光が瞬いた。ついで、ぴりぴりとした不快な痺れと熱が、指先から腕、首へと伝わってくる。

「なに、これ……」

エミーリヤは呻いた。白い光の明滅と共に、彼女の脳裏にぼんやりとした光景が浮かび上がった。まず見えたのは、部屋の中にいる男の後ろ姿だった。黒いコートを着た中肉中背の若い男性だ。彼は手にした拳銃を見つめてから、それを思い切り床へと叩き付けていた。妙な行動だ。目を開けた彼女は、手の中にある拳銃を見下ろす。先ほどからどうも違和感を覚えていた。この軽さと、先ほど浮かび上がった映像、そして手のひらから染み込んでくる熱。これはただの拳銃ではない。

「まさか超能力者が絡んでる？」

即座に、エミーリヤはその可能性を見いだした。そして拳銃を手にしたまま立ち上がった。心臓の鼓動が速まる。『力』を使った痕跡は、超能力者であれば感じ取ることができると聞く。彼女の場合はそれを熱として感知することが多かった。今の感覚には覚えがあるし、間違いないだろう。この拳銃には、超能力により何かが施されている。

「ちょっと、こんな日に能力者と遭遇だなんて。どういうことなの」

喜ぶべきなのか悲しむべきなのか。微苦笑を浮かべながら、エミーリヤは再び空を見上げた。頬を打つ雨はますます強くなっている。できることなら早く帰るべきだ。雨の日は誰も彼もが部屋に閉じこもってしまう。仲間も犯罪者も。

しかし、大雨は全てを押し流してしまう。土砂降りの次の日は、手がかりとなる残留思念を読み取れなくなることが多い。それらも洗い流されてしまうのだ。そうなると彼女でも、拳銃の持ち主を見つけられなくなる可能性が高かった。

「なんて巡り合わせなの。……仕方ないわね」

嘆息しつつ、エミーリヤはもう一度拳銃へと意識を集中させた。もっと詳細に、もっと広い範囲の情報を、読み取る必要があった。男がいた建物を特定できれば、そこからさらなる情報を掴むことができる。体を浸食するがごとく染み込んでくる熱に耐えて、彼女は力を行使した。拳銃、黒いコートの男、薄暗い部屋に錆び付いた扉、汚らしい通路……そこまで読み取ったところで、彼女は身を翻す。

見えた景色には覚えがあった。ここからさほど離れてはいない。蔦をあれだけ這わせた門が、幾つもあるとは思えなかった。しかもあの傾き具合は、他では見かけない。彼女は黒いコートが雨を弾く音を聞きながら、小走りで進む。

グラントルにある建物は、どれもこれもがどこか歪で不安定だ。細く上へ上へ伸びているものもあるし、天井が階段状になっているものもある。傾いているものも多い。中に空間があり、石のように見える薄墨色の壁でできている、という点だけが共通している。誰がどのようにして作ったのかもわからないので、壊れたとしても直すことは難しい。彼女たち空中警備隊はその保全にも努めているのだが、うまくいっているとは言い難かった。

「拳銃に力を使うなんて、そんな危ないことを。また建物が壊れたらどうするのよ。こんなことを繰り返していたら、グラントルだって沈みかねないのに」

声に出すとますます苛立ちが募った。こんなことをするなんて、自殺願望があるとしか思えなかった。取り返しの付かないことになったらどうする気なのかと、今すぐ問い詰めたくなる。グラントル祭の日にグラントルが落ちたとしたら、誰かはきっと皮肉混じりに「因果だ」とでも言うだろう。

グラントルが突如として空へ浮き上がった日を、人々はグラントル祭と呼び、いつしか祝うようになった。今年でちょうど八十回目だ。祭りと言っても派手に何かをするわけではなく、皆は家の中で静かに祈りを捧げ、現状に感謝し、穏やかに食卓を囲むのが一般的である。

グラントルの正体について、詳しいことは何もわかっていない。それは三百年ほど前、前触れもなく不時着した無人の宇宙船だった。墜落したと言ってもいい。その時の騒動のことは多くの書物に記録されているが、どれが真実なのかエミーリヤには判断できなかった。とにかく大混乱の中、たくさんの人々が亡くなった。安全に住める土地は減り、食料の調達にも難儀したという。

ようやく世界が混乱から抜けだし、改めて謎の宇宙船の調査をするようになった、その十数年後。人々は再び衝撃を受けた。ある日忽然と、宇宙船は浮き上がった。動かし方どころか何一つ明らかになっていない状況で、調査員を乗せたまま、船は浮上した。空の真ん中で静止した元宇宙船を、今ではグラントルと呼んでいる。そう名付けたのはグラントルで調査を続けていた科学者たちだ。名付けの理由については諸説あり、定まったものはない。

宇宙船が空に浮かんだ後も、調査は続けられた。高度はさほどではなかったため、寒さや気圧の差にさえ慣れてしまえば、動くのにほぼ支障はない。それ故、地表との行き来に時間もお金も奪われていった調査員たちは、次第にグラントルで生活するようになった。エミーリヤの祖父母もそういった者たちである。当初は色々と苦労があったようだが、今は足りない食料を地表から輸送するくらいで、特別な用がなければグラントルを出る必要もなかった。

正確に言うと、宇宙船の中心部がグラントルの実質だ。周辺部は現在も手つかずのまま残されている。その最大の理由は日光にあった。中心部の天井は大きなドームに覆われていたのだが、宇宙船が浮かび上がる数年前に、前触れもなく崩れ落ちていた。そのおかげで中心部には陽の光が差し込むようになり、今では地球の植物もしっかり芽吹いている。土を持ち込めば、小規模な畑だって作れた。

それは調査員たちにとっては幸いなことだった。彼らはグラントルを調べつつ、生活環境を整えていった。今となってはどれだけ本来の宇宙船の部分が残っているのか、把握する

背中合わせアンソロジー「アルギエバ」　企画サイト

http://indigo.opal.ne.jp/anthology3/

イベント頒布情報、通販についてはこちらからどうぞ！

背中合わせアンソロジー「アルギエバ」ミニ

http://p.booklog.jp/book/81517

著者：藍間

著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/aima/profile

感想はこちらのコメントへ

http://p.booklog.jp/book/81517

ブクログ本棚へ入れる

http://booklog.jp/item/3/81517

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）

運営会社：株式会社ブクログ